

近藤 浩子 教諭

名古屋市出身。大学卒業後、金城学院高等学校非常勤講師を経て、中学校・高校で教鞭を執る。現在は中学校で国語・総合的な学習の時間を担当。2016年から生徒会顧問。



言葉によって心は近づき、世界は広がる 面白さと重み知り、責任を持てる大人に

「言葉に興味を持つと世界が広がります」とおっしゃる近藤浩子先生。ご自身も幼いころから読書に親しみ、その一方で子どもたち相手に運動を教える活発な学生時代を送っていらっしゃいました。言葉を介して、生徒1人ずつと成長し合えたらとの思いから教師の道へ。言葉の重みを知る人になってほしいと願い、日々生徒たちを教えていらっしゃいます。

元気一杯だった中高生時代 ボランティアで体育を教える

私の中高生時代は一言で言えば「元気な子」でした。小学生の時は器械体操を頑張る、中学時代は陸上部に。高校時代はテニス部に所属し、得意科目は体育でした。

また本を読むことも好きで、勉強もとりたてて嫌いではありませんでした。部活動に一生懸命取り組み、毎日暗くなるまで練習したことにより仲間との絆が深まったと思います。さらに同級生だけではなく先輩、後輩との縦の関係を通して学んだことは多いと思います。

大学進学では、体育と国文学のどちらに進むかで随分迷いましたが、自分の体のことや先生のアドバイスを踏まえて、国文学を選びました。学生時代の研究テーマは近代文学。好きな作家は太宰治です。人間誰しも二面性を持っていると思いますが、ほとんどの人はそれを出さないように生きています。それを恥じらうことなく出してしまうところが太宰治の強さであり、弱さでもあります。一般的に彼の作風は下降思考だと言われていますが、その中には上昇思考が見え隠れしています。その二面性の中で揺れ動く姿を反映した作品に惹かれました。

大学時代にはもう一つ打ち込んだことがあります。ボランティアで行っていた少年体育のリーダーです。夏はキャンプや水泳、冬はスキーやスケート、普段は体育館でマット運動や跳び箱。体育教室の先生というよりは体操のお姉さんという感じです。子どもが好きということもありますが、体を動かすこと自体が楽しく、卒業後も含め5年間携わりました。その時の経験が、教師の仕事に興味を持ったきっかけになったのだと思います。



ありのままの自分受け止め 好きになってほしい

最終的に教師になる決め手となったのは教育実習です。実習先は卒業した公立高校に行きました。初めての授業で教壇に立ったとき、生徒たちの真剣な眼差しに足が震えました。「果たして私は生徒たちの真剣さに応えられるくらいの準備をしてきたのだろうか」と考え、生半可な気持ちではとても教壇には立てないと自分自身を反省するとともに、教壇に立つということは、重大な責任を伴うことなのだと思います。

ホームルームの時間では、ボランティア体験や進路選択の話を生徒と一生懸命にしました。生徒も熱心に聞いてくれて、中には「自分も

活動をしたい」と実際にボランティアをはじめた生徒もいます。こうした経験を通して、自分が真剣に取り組めば生徒も応えてくれるのだと実感しました。教育実習の授業を行う中で、言葉に対する興味も広がりました。文字も、話す言葉もコミュニケーションの手段です。言葉を介して生徒とともに人として成長し合えたら、こんな素敵なことはないと思います、とても難しい仕事であるけれどもやってみてほしいです。

最近の子どもたちは、どうすれば自分の気持ちが伝わるだろうかと言葉選びに悩んだり、美しい言葉を使いたいという思いを持つことが少なくなり、とすれば感情のすべてを「ヤバイ」の一言で済ませてしまうようなところもあります。もっと言葉に関心、興味を持ってほしい、いろいろな言葉が使えると楽しく、自分の世界が広がるということを知ってほしいと思います。生徒たちには言葉の重みを知り、自分の言葉に責任を持てる大人になってもらいたい。ありのままの自分を受け止め、自分の長所をたくさん発見し、もっと自分のことを好きになってほしいと願っています。

近藤先生はどんな人!?

担任を受け持つ1年生に先生の印象を聞きました。「授業が分かりやすい」「記憶に残るよう説明をしてくださる」「注意するときは優しく言うてくださる」との声が聞かれました。授業以外でも「お姉さんのようにしゃべりやすい」「トレンドにも詳しい」「行事があるごとに声を掛けて励ましてくださる」との意見があり、近藤先生の親しみやすく温かなお人柄が窺えました。

